

外来精神医療

第4巻第2号 別刷

幼老共生

～高齢者と子どもの生き生きとした関わり～

Child-Matureold Symbiosis
—vital involvement with child in old age

Ikari Kouichi

碓 浩一

*碓精神医学研究所

平成17年3月31日

日本外来精神医療学会

The Japan Association of ambulatory Psychiatric Serves

*〒812-0013 福岡県福岡市博多区博多駅東 1-1-33 はかた近代ビル 2F

(原著)

幼老共生

・高齢者と子どもの生き生きとした関わり・

Child-Matureold Symbiosis

—vital involvement with child in old age—

碓 浩 一

碓精神医学研究所



碓浩一 略歴

昭和20年 中国瀋陽生まれ
福岡県前原市在住
昭和46年 九州大学医学部卒業
昭和52年 九州大学医学部助手、宮崎医科大学助手
昭和54年 大分県立病院精神科副部長、57年に九州大学医学部講師として帰福
昭和60年 福岡教育大学保健管理センター所長
昭和62年 同センター教授
平成13年 同上を退官、碓精神医学研究所を開設、現在に至る

専門分野：精神分裂病の精神病理学的研究、アルコール依存症の臨床的研究、思春期青年期の精神病理等、日中友好交流子どもキャンプ実行委員長、九州シルクロード協会理事、特定非営利活動法人「幼老共生推進プロジェクト」代表、福岡県高齢者能力活用センター理事などの社会活動を行っている。

I. 幼老共生とは

著者は幼老共生 child-matureold symbiosisという暮らし方を提案している。(5)(6)

子どもは生まれたときから成熟した老人と生活を共有しなければならないという主張である。これは血族の三世同居を意味するものでも、具体的な保育を老人が引き受けるということを意味するものでもない。人間の子どもの心理・社会的成長のためには、風景のように、環境として、老人の存在が必要だという意味である。必ずしも現実の老人である必要はなく、良き老人の特質を備えた成人であればそれでもよからう。

そのよき老人の特質とは、過去に多くの欲動に振り回されながらもどうにか身を処して生き抜き、今やそれらの欲動から少し距離を置き、人生に終末のあることを予期しつつ、自分の人生にそれなりの満足感を保ち、淡々と日常生活を営みながら、なおかつ周囲の人々に対して支持的、共感的に振る舞う能力を備えた人々である。あくまでも理念的な特質であるから、実際はそこそこに上記の傾向があればよしとしなければならない。

乳幼児を包む人間的な環境として、常に共感的な人間の反応が準備されていることが必須であり、それを引き受けるのは老熟した人々でなければならない。老熟した人格、その人格を構成する文化的環境が母子関係そのものを包み込み、常に身近に浸透しており、心地よい承認のまなざしをあてる。

この状態を幼老共生という。

最も似通った考えに、H.コフート(10)の自己-自己対象関係(self-selfobject relationship)がある。コフートは自己と自己対象(著者の言う「老」)の関係について次のように述べている。

「人生を通して、時間と空間において、凝集し調和した堅固な単位として、人は自分自身を体験するだろう。それは過去と結びつけられており、創造的で生産的な未来を意味深く指している(しかし)そうであるのは、人生のそれぞれの段階で、人間的環境のうちの何人かの代表者たちを次のように彼が体験するかぎりにおいてである。つまり、喜んで彼に反応してくれ、理想化された力と落ち着きの源泉として彼に利用可能であり、黙って存在しているが本質において彼と似ており、そして、ともかく、彼の内的な生活を多少なりとも正確に把握することができる。」

たとえば、幼い頃の静かな、日常的な、しかし本人にとっては自分を支える大きな自己-自己対象体験として次のような例を示している。

「— 内容は決して抑圧されなかったものの、内容の情緒的重要性はこれまで決して評価されなかったその記憶は— 彼女が祖母の台所にいた(おそらく4歳の時)、そして祖母がパン生地をこねており、彼女も静かに、祖母が働いている大きなテーブルの隣の小さなテーブルの上でパン生地をこねていたというものだった。」

活動報告

「なんとあっけないこと！と読者は思うかもしれない。実際、フロイトが無意識から露わにした原光景、子供の性的興奮と死の願望のドラマと比べると、なんと見たところでは面白みのない、日常的な出来事であろう。おそらくそうだろう。しかし私は、劇的な興奮と真実の価値は必ずしも相伴うものではないと指摘したい。少女が台所のなかの祖母のとなりで静かに仕事することから得たかもしれない自己（セルフ）の支持、少年が父親の隣で“髭をそり”、地下室で父親の道具とともに父親のとなりで働くことから得たかもしれない自己（セルフ）の維持——これらはもちろん劇的でない日常の出来事である。ドラマは、あるいはもっと正確には悲劇は、子どもが慢性的にそのような体験を奪われたときに、それに続いて起こるのである。」（下線は錠）

コフートはこのような自己対象の存在は子どもにとって「心理的酸素、それなしではわれわれが心理的に生き残ることができない」ものだという。

コフートの自己対象は老人に限るものではない。しかし、自己対象の持つ特質をよく吟味すれば、老熟した成人の持つ特質を備えている（少なくとも関係を持つ自己・セルフはそう受け止めるような対象である）。

静かで、いつも変わらず自分を支持してくれる、現実の利害の衝突する世界から少し距離を置いており（もしくは子どもには自己対象の現実の葛藤は影響がなく）、求めると常に安心できる応答が返ってくる。このように共感的・支持的に応答する老人のイメージはまた、E.H.エリクソンが謂う「祖母性grandparenthood」(3)の概念にも似通っている。

米国にボランティア、コマーシャルベース両方で盛んに行われて

いる社会活動、Inter-Generational Program (16)、世代間交流活動がある。こうした活動においても、核となるのは高齢者と子どもの結びつきである。

幼と老の親密な関係は、現代の産業化した先進諸国の社会で最も失われた関係である。

結果として子どもたちは、青年期まで実社会の多年齢で構成された人間集団と交わる機会がない。人間としての成熟を達成することなく成人になる可能性が高くなった。

II. 20世紀的社会システム・核家族の破綻

生きる力を失いつつある時代

警察白書によると、平成10年、我が国の自殺者は年間に32,863人となった。平成9年は24,391人であり、それまではずっと二万数千人台であったのが、突如8,500人の増加である。それ以来ずっと三万数千人の大台を超えている。自殺者の7割強は男性である。特に中高年の自殺率が急増しているのは象徴的で、戦後生まれの世代が社会の激動の渦に飲み込まれているような印象を受ける。

中高年に限らず、青少年から働き盛りまで自殺者は増加している。全国のどこかで毎日、100人近い老若男女が自殺しているのである。

少子化が進む中で、どの世代をとっても元気がない。

100万人を超えるとされるひきこもり、就職せず、勉強もせず、職業訓練も受けようとせず、一見平然と暮らすNEETが60万余人。こうした傾向をはらむ高等学校の中途退学者が10万余、小学生・中学生の不登校が13万余。さらに虐待児に象徴される育児困難、各種の子どもの成育障害、低年齢化する青少年犯罪、若者の無気力、DV、中高年の鬱など、現代社会は衆目の一致するところ、人が“生きる力”を失いつつある。

コフートのいう「心理的酸素」

がひとの生活空間から失われつつあり、先進国社会は心理的窒息状態に陥っているのではなからうか。

戦後日本社会の繁栄は現在の高齢世代による

客観的に見ると、日本は今もなお世界1の長寿国で、治安はよく、世界第2の経済大国である。貧富の格差はきわめて少ない。社会保障制度は(今のところ)世界1、行き届いている。世界の先進諸国と比較しても、日本は20世紀に最も成功した国である。

しかし、それはあくまでもこれまでのことだ。

振り返ってみると、今の日本社会の繁栄は、高齢者世代が築き上げた成果である。大まかに言うと、昭和20年終戦の時にすでに自我を確立していた世代（現在80歳前後から上の世代）の成果である。

明らかなことは、戦後復興期の日本には、250万人とも推定される国民が戦争で命を落としたにもかかわらず、なお日本社会には人間としての土台がしっかりした、すそ野の広い人材が居たということだ。廃墟のなかで飢えと闘いながら、国内でさしたる混乱もなく、急速な復興、発展を成し遂げたのは総じて戦前までの日本人は人間としてよく育っていたということである。

人材を抜きにして幕末から百年で近代化を達成してきた歴史を語ることはできない。明治維新という途方もない構造改革は何故成功したのだろうか。これも黒船によって否応なく巻き込まれた国際化の渦のなかで、構造を変えるだけの力を当時の人々が保有していたということに他ならない。明治維新という偉業は当然のことながら、当たり前の、日常的な、当時の子育てによってもたらされた成果である。

翻って、大きな節目を迎えた現在の日本社会に、社会をよき方向に変えて行く人材が育っているだ

活動報告

ろうか。子どもを育てるよき環境があるだろうか。

終戦の廃墟から、復興期、経済成長期、バブル期、そして現在まで、日本の子どもたちはどのように育てられたのだろうか。事態は日増しに悪化してきているように思う。

過去の子どもたちが現在の大人たちだ。現在のはつねに過去の結果である。胸に手を当てて、我々は過去を振り返ってみなければならない。

「近ごろ、頼りなさそうなかけろろうのような青年が増えてきた気がしています。こういう人々が、はたして立派な市民として将来やっていけるだろうか。日本全体の電圧が低下しているのでしょうか」と、司馬遼太郎氏は憂いているが、それからすでに20年が過ぎている。零歳の乳児が青年となる年月である。(坂本龍馬生誕150周年記念講演 1985.8.8 高知県立県民文化ホール) フロイトの人間観

近代社会はどうして若い夫婦のみの家族で子どもが育つなどと思いつ込んだのだろうか？

市民社会は、自立した個人の存在が前提である。

したがって、自立した個人は如何にして育つかという問いとその答えが求められる。そこでこの小さな核家族という器で、子どもがちゃんと育つ、という根拠が必要となる。

S.フロイトは1つの解答を出した。それが無意識の発見、転移という人間関係の原理、抑圧や防衛、抵抗などという精神力動の概念化である。

フロイトは欲動心理学、自我心理学理論(4)で、父母と子どもの三角関係の葛藤を通して自我が形成されるというエディプスコンプレックス論を唱えた。1つの仮説である。

アメリカの人類学者 George Peter Murdock が主張した核家族 nuclear family の理論(1949)は、核家族こそ地域、時代を超えた普

遍的な家族の構成要素であるとし(12)、1950年代に、アメリカの社会学者のT・パーソンズはフロイトの理論を大幅に取り入れて、核家族によって子どもの社会化(socialization)ができると主張した(13)。家庭の中で、母親が子どもの養育、父親が生計の責任、社会的価値判断というように、互いに補い合うように役割があると説明している。

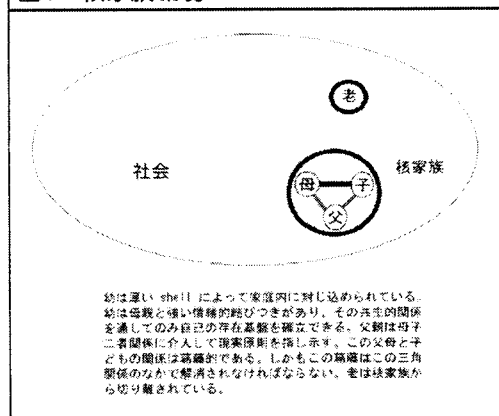
20世紀はフロイトの人間観が先進産業社会を支配したのである。

葛藤の増殖、離婚非婚、そしてアトム化

図1は核家族環境を示している。閉じられた小集団においては人間関係の緊張が高まる。

核家族とはそのような実験条件そのものである。若い男女が子どもを産み、共同で暮らし、ほかに老人に象徴される成熟した人間との関係が完全に遮断されていれば、親子のあいだにはフロイトの言ったとおりの心理機制が生ずるに違いない。

図1：核家族環境



子どもたちは若い父母の未熟な意図された憎しみによって攻撃を受けるのみではない。

愛という名に隠れた母親・父親の意図せざる疎隔、憎しみという二重拘束(ダブルバインド)によって、子どもたちは生きるすべを失うのである。

この家族という逃げ場のない空間の中で、子どもたちのこころは乾燥していく。ひび割れた心の傷は憎悪の対象を空想的に肥大させて行く。

不登校、いじめ、学級崩壊、猟奇的少年犯罪、そして、オウム真理教事件のようなカルト事件、それら全ての原因が実は核家族にある。忘れてはならないことは、全共闘世代がオウム世代を育て、さらにそのオウム世代がいま子どもを育てる時代となった。

間違っても老人が核家族内に紛れ込んだとしたら、老人も虐待の対象となる。

未熟な若い夫婦の関係は、容易に憎しみに変化する。すでに日本でも家庭内暴力(domestic violence)、夫に殴られ、屈従を強制されながら、家族という透明な牢獄から逃げることのできない妻が目につき始めている。

つまりこのようにいうことができる。核家族化が進行する社会で二世帯の血族が閉ざされた家庭という舞台上で心理劇を演じれば、フロイトの時代にはフロイトの書いたシナリオのようなドラマを演じたのである。そして現代でもやはり閉ざされた舞台上で別種のドラマが演じられている。そのドラマは次第に醜悪となってきている。

このような状況を打開するのが「幼老共生」の提案である。(図2)

III. 幼老共生社会をめざす 父性と母性

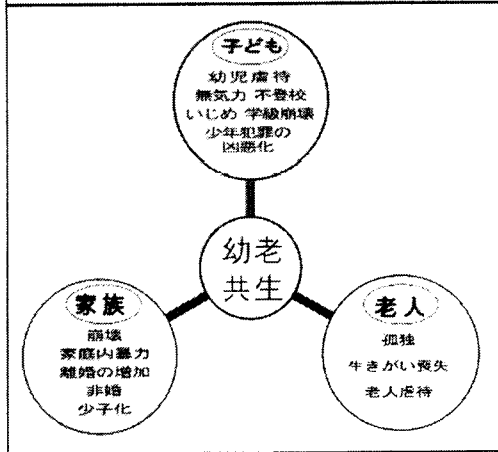
E.H.エリクソンは壮年期の乗り越えねばならない危機として generativity crisis を挙げている(3)。次の世代を生み育てる心が人々から失われる危機である。それはまさに父性と母性という語で言い表される資質を大人たちが失う危機である。

現代の先進国においては産業化、

活動報告

都市化、核家族化といった社会構造の急激な変化の中で、父性と母性という言葉で言い表される人類の知恵、様式の継承はきわめて困難になっている。

図2：核家族の破綻と幼老共生



核家族における父親は、父性すなわち社会的なルールを体現する唯一の存在である。また同様に核家族における母親とは母性という言葉で言い表される子どもを守り、慈しみ、育てる役割を担う唯一の存在である。

しかし現実の若い父母にこのような父性や母性を身につけた者はほとんどいない。もとより現代の核家族を構成する若いお父さん、お母さんにこのような父性と母性を期待できるわけがないことは明らかである。したがって現代社会では子どもの養育がきわめて困難となり、育児ノイローゼ、出産後の抑鬱状態、さらには幼児虐待が増加し、ひいては人間としての成熟を果たしていない成人が社会に年々増えてくるのは当然のことである。だからといって、若い父母が子どもを養育しやすいように教育・啓蒙活動を行ったり、保育所を増やすことで効果が上がるような簡単な問題ではない。

父性も母性も人類が存続してきた長い歴史の過程で純化された理念型であり、おそらく民族や時空を超えた普遍的なものである。

それは動物と人間を分ける、人類の生活の最も低層を形成する、あらゆる文化の基盤とも言うべき子どもを包む社会環境を示している。それはそれぞれの文化圏で、それぞれの精神生理学的発達段階の子どもに対して、成熟した大人が、適切に振る舞う応答の仕草、子どもの対して抱く情緒的な反応まで含めた子どもを包む環境を意味している。母性も父性もその社会に浸透している子どもを包む理想的な養育環境のことである。子どもの養育はすでにあるそのような文化的な人間環境を前提として、若い男女が体験するものである。

父性も母性も文化的に体験によって獲得され、継承されるものである。伝統的な生活文化が維持されている地域では、若い、したがってその多くが未成熟である現実の父母が、育児体験によって次第に父性と母性を身につけてゆく仕組みが備わっている。

たとえば著者が調査した新疆ウイグル自治区ホータンでは、第一子は祖父母が手元に置いて育てる習慣がある。子どもは祖父母をお父さん、お母さんと呼ぶ。祖父母は別にとがめ立てもせず、孫がそういうのを認めている。この時、子どもは実の父母をお兄さん、お姉さんと呼ぶという。第一子には祖父母の名前を付けることが多いという(8)。

そうしたなかで20世紀に発達した精神分析的心理学から子どもと父母以外の人間との関係による精神発達の可能性がすっぱり抜け落ちていることは驚くべきことである。よしんば実母以外の誰かが養育したとしても、それは「母に代わる者」であってやはり母子関係なのである。ウィニコット(15)の言う good enough mothering は文字通り、母親のほど良い保育態度である。母親以外の保育者の存

在は母子関係を混乱させる危険な要因となる。同じような養育の真理を述べた貝原益軒の、「育児の要諦は三分の飢えと寒を帯ぶべし」は成熟した老人が若い父母に教える論ず趣がある。益軒が81歳の時の著作・『和俗童子訓』のなかの一節である。

F.ドルト(2)という母親でもある精神分析医は、『子どもが誕生するとき』という著書で、「時宜を得ぬ乳母の交代は、子どもの心に外傷を残す。やめていく乳母は、(言葉あるいは身振りによる)言語的コミュニケーションの人間の指標をもちさる。子どもは孤独の砂漠に取り残される。子どもは新しい乳母がくるたびに人間相互のコミュニケーションを新たに作らねばならない。この網はもろく、乳母がやめるたびに破れる……」と、養育する者が代わることは子どもに強いダメージを与え、「発話、精神運動性の遅れ」を引き起こすと警鐘する。

これは常識で考えればおかしな話である。

親はなくとも子は育つし、渡る世間に鬼はなし、生みの親より育ての親、である。

昔は日本でも貧乏人の子沢山で、母親は生活に忙しく、子どもにつきっきりになるわけにはいかなかった。小さなお姉ちゃん、お兄ちゃん、祖父母、手の空いている者が子守をした。それでその子が性格の悪い困りものになったり、ノイローゼや精神病になるなどと荒唐無稽なことを誰が考えつくだろうか。

要するに核家族化を普遍的な子どもの養育環境とする前提で、母子関係のみで特に乳幼児期の正常な心理・社会的な発達を論じるといって非現実的な論理を展開している。「good enough mothering」(15)も、M.S.マラー(11)の「mother-child symbiosis」の時期から、「separation individuation process」へと乳児が自立に向かって成長し

活動報告

てゆくという母子共生・分離個体化過程も当たり前の話であり、当たり前でないのはその過程をたった1人の母親が引き受ける以外にないという前提である。成熟したおとなが乳幼児の周囲に居れば自然に、そうした時期をスムーズに通過できるように若い母親を誘導するに違いないし、そうした周囲の知恵によって母親は母性的に振舞うことができるようになる。

E.H.エリクソンは『老年期』(3)の中で、「祖父母的生殖性」という老人の希望とも言うべき前向き、生産的な心的傾向をとりあげている。老人のある種理想的な生き生きとした状態に、老人の祖父母、自分の子ども、孫、本人を含めて5代に渡る思い出と未来への希望を統合的にすりあわせ、繋ぐ作業にいそしんでいる心のあり方を見いだしている。かつて幼い頃祖父母と親密な体験を経験している老人は自らが老いても、子や孫に信頼と希望を見だし、生き生きといきる……。

もとよりいつの時代でも現代よりはずっとましであったであろうが、年若い父母に父性と母性を期待することはできなかったであろう。昔は平均寿命もみじかく、生殖能力が備われば12,13歳から出産するのは通常のことであった。したがって、子育ても年若い父母の父性と母性を育むことも、ともに社会集団の基本的な仕事であった。近代以前の農漁業、家内工業、商業の時代までは、若い家族は集団の持つ文化的な知恵に包まれて、とくに知恵の担い手である「老」に見守られて成熟していったのである。

再確認すべきは、核家族の理念型には老人の位置が完全に切り捨てられていると言うことである。家族の範疇から祖父母は除外されている。子どもの人間関係は、そのパーソナリティを形成するスタートから老人との関係を絶っている。

T.パーソンズはそれをやむを得ないことだとする。

「職業体系が発達して社会のさまざまな機能を自らのうちに吸収することは、ある意味で[社会]構造の構成要素としての親族組織の相対的重要性を犠牲にして行われなければならない、以前は親族単位の機能であったところのものを多く犠牲にしなければならないということの意味する」(13)人はこの世に誕生し、育ち、自立した人間として生活をし、やがて老い、人生の終末を迎える。社会の理想を描くのであれば、老いたる者に人生の果実がもたらされるべきである。パーソンズの理論に代表される20世紀の人間観はもともと老いてこの世を去ってゆく人間にとっての「家族」を視野におさめていない不完全なものであったと考えざるを得ない。

家族と社会——時代的変遷

このような時代に子どもの養育はどうすべきなのか、おそらく時代は新しい発想を求めているよう

に思う。もう1度、人間はどのような存在で如何にして成熟を遂げていくのか、改めて根本から考え直すべき時がきている。

表1は個人と家族、社会の相互関係の時代的変遷を、旋らが提唱する「幼老共生社会」と比較検討したものである。

産業化を後追いつける国は、血族社会の構造を残している。いずれの国も歴史的には血の濃さによって結束する大家族勢力が攻防を繰り返しながら、部族、部族国家を形成してきた歴史を持っている。さらに部族国家は民族的アイデンティティによって結束し、抗争を繰り返してきた。こうした状況に日本の場合には突如、近代化の黒船が到来したわけである。このような産業化前社会では、人は「血」によってつながり、集団のなかでのみ位置づけがなされ、家族は父権的な大家族を形成する。集団の基本的な価値は「血統」にある。

性愛は、子孫を時代に繋ぐ神聖な生殖行為と明確に区別される。したがって「性」はタブーである。

表1：個人と家族、社会の比較文化

	人のつながり	人間の単位	人間関係	家族の単位	タブー	価値
産業化前 社会	血族 部族・民族共同体 宗教	集団 血族主義 民族主義	垂直	大家族 血族、父権家族	性	血統
産業社会	利益 利益共同体	個人 物質的個人主義*1 (利己主義)	水平	核家族(血族) 母子共生	死*3	健康
幼老共生 社会	共生 交齡社会*2	個人 共生的個人主義	水平	大家族(非血族) 幼老共生 新・地縁家族	破壊 怒り	信愛

(*1)W.M.ワット (14) (*2)交齡社会 (Inter-generational Society) (*3)P.アリエス (1)

表2：核家族と幼老共生型養育環境の比較

核家族の養育環境	幼老共生型養育環境
閉鎖系 母子共生 孤立家族 対象関係の葛藤 (家庭内の感情負荷が過熱) 「老」の不在・権威の喪失	解放系 幼老共生 共生大家族 遊戯的環境 「老」の権威

活動報告

この伝統的社会と産業化社会の隔差は大きく、示唆的である。産業社会では人は利害によってつながり、人間の単位は個人、血族による最小のシステムであり、老人は家族の成員ですらない。

20世紀は子どもの世紀といわれた。その基本的な意義は、教育による人間の可能性の発見であったと言える。21世紀は人間が生物学的に与えられた寿命を全うできる時代の到来とするなら、老いの世紀と言うことができる。そこでは幼老共生を人のつながりの基盤とする、新しい「幼老共生家族」が現れるのではないだろうか。

もちろん、現代社会に血族による大家族制が実現されることは時代の逆行でしかない。

我々は、血を離れた、身近に暮らす者同士の普遍的な「幼」と「老」の結びつきの可能性を想定している。

表2 は核家族の養育環境と幼老共生型養育環境を比較した。子どもは血縁関係のあるなしは問わず、成熟した老人の視線に包まれて養育される。特に乳幼児期においては、核家族のような人間関係の葛藤は老の知恵によってコントロールされる。乳幼児早期より、雑多な人間集団の中で生活する。子どもにとって生活とは遊戯である。遊戯とは人間が不可避免的に体験する諸々の苦、それ自体を能動的に快に変えていく体験である(6)(9)。

若い父母は老の視線の中で子どもと関わり、やがて成熟した父母となっていく。そしてこの幼老共生の場が地域社会とつながる1つの集団の単位となり、新しい地縁家族の役割を担う。

老人を排除した社会

共に生きていく人間集団から、老人をきれいに排除したのが、核家族の社会システムである。その弊害は社会の随所に現れている。老いとは、社会の基盤そのもので

あるからである。

青々とした木の葉もやがて散り、枯れ葉となって堆積する。老木の周囲に数多くのひこばえが芽を出すように、次の社会の準備をして育む。だから、老人を排除した社会は老木を伐採した森林のように荒廃する。

具体的には、次のように社会が生命的なダイナミズムを失ってしまった。

一、「生命」の連続が途絶えてしまった

本来生命とは連続するものである。社会という人間の生命群には死などというものはない。ひとりの人間にとっては、幼い子どもであったり老人であったり、そして死が訪れる。

かって自分が幼い子どもであったように、目の前の子どもも、やがて老いていく。そのことの自覚は寂しくもあり、悲しくもあるが、人間にとって希望でもある。人間は個体を越えて未来につながっているという感覚を人々は共有するものである。

ところが近代になって、社会から老人を排除するようになり、個体の生命が唯一の価値であるかのような生活を始めた。老いを他人事として考え、ついに死はすべての終わりだと考え始めているように思われる。

その結果、社会が一世代の時間感覚でしかものごとを考えなくなってしまった。

死んだらおしまい。年を取ったらおしまい、そんな暮らしになってしまった。行政の単年度予算のようなもので、その場しのぎ。世代を越えて社会を考えることが出来なくなってしまった。

町の帰趨を見ればわかる。30年前、子どもたちの声でにぎやかだった都市郊外の巨大な団地は、いまや火が消えたように寂しくなった。児童数の急増で建設された小中学校はかつての僻地の小学校の

ように廃校となっていく。

多くの団地そのものが高齢化している。老人夫婦の世帯、独居老人の世帯数が増加し、あれほど端整を込めて手入れしていた庭も見るとなく、草ぼうぼうとなっている。

その人々も老人施設に移り、やがて団地としての終わりを遂げる。子どもたちの歓声、母親たちの華やきも消え、一世代前と比べると、まるで廃墟である。

—— いずれ、それらの古い町並みはまたブルドーザーで平地にして、高層マンションを建てればよい。そんな発想の暮らしをしている。

二、経験智の伝承が途切れてしまった

経験の知恵は決してデータベースに蓄えることが出来ない。生きた社会の知恵は仲介者を介してのみ、次の社会に受け渡されるものである。老人を実社会から遠ざけるということは、知恵の水源を止めるような暴挙である。

社会は「古い」ものは「無価値」というように思いこんでいる。とんでもないことだ。

最も深刻なことは、人間社会の基盤と言うべき子育ての経験智が途切れたことである。

黒田藩の貝原益軒が81歳で著した『和俗童子訓』は大変優れた育児書である。老いた益軒が次の時代のために、渾身の力を振り絞って言い残した知恵である。人は如何に育つか、なまじの心理学など及ぶべくもないほどの知恵である。

しかし、いまの保育園で益軒の知恵を伝える者は誰もいないだろう。ちなみに、益軒は人柄の良い養育者(乳母)を選びなさい、年寄りの話を喜んで聞く子どもに育てるように、と教えている。

三、文化が成立しなくなった

文化とは、要するにその社会が達成した生活のかたちである。

日々の暮らしの細部にわたって、洗

活動報告

練された美しいかたちの表現である。時代の感性、美的なものが、時間とともに熟成したかたちである。

茶道、華道に限らず、下町の職人芸も、子どもたちの伝承遊戯も、日々の暮らし方も、継承され、変化しつつ、その時代の文化を生み出す。

そう考えると、あらゆる文化的なもの、本来、老が所有するものだ。

四、社会が弾力性を失ってしまった

要するに、賢いつもりで、愚かにも老人を排除した社会は、逆に可塑性を失い、古びたゴムのボールのように弾性を失ってしまった。

社会システムが制度疲労を起こしているのみではなく、社会は活力を失いボロボロになりつつある。

五、未熟な、愚かな老人が増えている

社会から、そしてなによりも幼い子どもとの結びつきを断たれた老人は、弱く愚かになる。老熟の機会を失い、生きている事への感謝、喜び、向上心を失い、あらゆる精神的なるもの、霊的なものに対して謙虚さを失いつつある。

六、子どもが育たず、家族が壊れつつある

何よりも、子どもと老人のあいだに起こる生命の触媒作用を失って、子どもも老人も生命力を失った。家族、要するに若い男女は、結びついて生きていく指標を見失った。そして家族は壊れはじめた。だからこう言わなければならない。

要約

産業化の成功にも関わらず、先進諸国社会では生活の基盤の揺らぎが生じてきている。

その直接の原因は核家族化にある。人々は幼い頃から心理社会的な

- 一 老人は若い者と一緒に暮らすべきである
- 一 老人はその存在そのものが幼を包み守る
- 一 幼老の共生から次代の文化が醸成される――樹齢数百年の老木の周囲に数多くのひこばえが芽を出すように
- 一 老いは自らその存在によって若い者に死を教える
- 一 老いは尊敬され慕われるべきである
- 一 老いは権威を持つべきである
- 一 しかしそのためにも、老人は血族や物欲から少し離れ、自分なりの心地よい人生を目指さねばならない

IV. 幼老共生社会に向かうために

本来子どもと老人は、一緒に暮らすものである。

幼いころから、知恵ある老人のまなざしに包まれて育つ。人生の悲しみやよろこび、安らぎ、ものあはれを知るひとびとが子どもと暮らす。これこそこの世で最も豊かで価値ある関係である。社会の肥沃な培地である。

子どもは老を通じて社会とつながり、老を介して若い父母との関係を形成してゆく。

現代社会では、この最も豊かな関係が失われつつある。危ういことである。地域社会が幼老の関係を守るようにならなければならない。

高齢者に対する敬愛、思いやり、そして乳幼児に対する慈しみの心が社会の基盤なのである。幼と老の自然な、豊かな関係の価値を知ることから始めなければならない。

意味で孤立し、関係を失っている。

列挙すると、各種の子どもの成育障害、世代間の関係の希薄化、地域社会と家族の関係の希薄化、地域社会における高齢者の孤立、虐待児に

幼老共生とは、血のつながった孫がおじいちゃん、おばあちゃんと暮らすことではなく、育児を高齢者に任せてしまうことでもない。

小さな家族の枠に縛られず、ただ、幼と老がお互いに顔なじみになれる風通しのよい場で生活すること、それだけである。身近に老人がいること、これが決定的に重要だ。そこから社会は動き始める。そんなことで社会が良くなるものかと一笑に付す人もいるかも知れない。しかしあえて断言しよう。21世紀の最大の課題は、「幼老共生」である。

幼老の関係の質が確実に次の時代の豊かさにつながる。

著者はすでに保育園の周囲に心地よい高齢者向けの優良賃貸住宅を配置するという具体的な提案を行っている(5)。その実現のためには、次のような考え方を社会と共有しなければならないだろう。

1. 若い父母だけでは決して子どもは育てられないことをまず社会の共通認識とする
2. 若い父母は、これから子育てと労働、社会体験をして人間としての成熟に向かう存在である
3. 精神的に子どもを見守り、若い家族を支えるのは人生経験豊かな高齢者の役割である
4. 地域社会には幼と老が生活基盤を共有する場が必要である。保育園と高齢者住宅を併設することからスタートする
5. この幼老共生の場が地域社会の機能的な中心の役割を果たす。ここを基点に多世代の人と人がつながり、社会は交齢社会へと成熟の道をたどる。

象徴される育児困難、そして核家族自体の崩壊などが挙げられる。この産業社会がもたらした核家族の弊害を如何にして解消し、子どもに豊かな養育環境を実現するかが物質的に

活動報告

は豊かな社会を達成した先進国の教育の課題である。

彼らが提唱する幼老共生 child-matureold symbiosis とは、地域社会で若い子どもたち（Youngest Generations）と高齢者（Oldest Generations）が生活の場を共有する状態を謂う。老は空気のように幼と保育者を包む。老は幼に対して積極的に関わる必要はなく、幼からの要求に応じて、共感的、支持的に、変わらずに応答する役割を持っている。また老は、子どもの養育環境を人間的な常識によって静かに包み、守る。同時に老に守られ、老を仲介して、幼は多世代の人間とかかわりを持つ。幼に

対して現実的に指示的、教育的に振る舞うことは控える。指示的、教育的働きかけは、可能な限り養育者に任せる。

このような幼老共生的環境が幼が心理的社会的に成長するために、必須の条件である。

幼老のこうした関係は、現代の産業化した先進諸国の社会で最も失われた関係である。

こうした幼老共生的養育環境を実現するためには、次のような共通認識が必要であろう。

1. 若い父母だけでは決して子どもは育てられないことをまず社会の共通認識とする

2. 若い父母は、これから子育てと労働、社会体験をして人間としての成熟に向かう存在である
3. 精神的に子どもを見守り、若い家族を支えるのは人生経験豊かな高齢者の役割である
4. 地域社会には幼と老が生活基盤を共有する場が必要である。保育園と高齢者住宅を併設することからスタートする
5. この幼老共生の場が地域社会の機能的な中心の役割を果たす。ここを基点に多世代の人と人がつながり、社会は交齢社会へと成熟の道をたどる。

Summary

In industrially advanced nations, compared with the developing countries maintained traditional way of life, people has been in a shaky living state, especially for younger and older generations. The source of the troubles considered as the increasing trend towards the nuclear family .

In a conditon of nuclear family, younger children are isolated psycho-socially, missed the chance to get good human relations. It is attended by many evils, such as many kinds of child's developemental difficulties, child abuse and/or negrect, family violence, divorce, family collapse.

On the other hand, older adults are sometimes challenged by loneliness and isolation from their families and communities.

Opinions presented in this paper is a conceptual idea of child-matureold symbiosis, insisting that children should to live together with old mature people who makes a harmonious surrounding environment, supports psych-social developement of the child.

The conclusion of this paper is as follows:

1. It is seriously hard for a young parent to raise up their child on their own in the environment of nuclear family.
2. In the present-day, young parent are not yet mature enough to care child, need social experiences.
3. On the other hand, caregiving young children, and supporting young parent is the role of the older generations with wide experience.
4. So that the living space , the public compaund facilities , nursary system and houses of old generations must be layed out, where young and old generations live together with heartfelt, intimate relations.
5. The living space in which young and old generations live together should be placed in the center of the whole local community.

